

外国語

1 高等学校学習指導要領の改訂に向けて（中央教育審議会答申より）

(1) 改善の方向性

ア 現行学習指導要領の課題

中央教育審議会答申では、外国語科における課題を次のように整理している。

- ・グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定されるため、その能力を向上させる必要があること
- ・学年が上がるにつれて生徒の学習意欲に課題が生じること
- ・学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないこと
- ・中・高等学校において、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に置かれた授業が行われ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が十分に行われていないこと
- ・習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に表現する必要があること

イ 課題を踏まえた外国語科の目標等の在り方

外国語教育における「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、上記の課題を踏まえ、各学校種段階の学びを接続させ、「外国語を使って何ができるようになるか」という観点に基づき、これまでの4技能を、国際的な基準であるCEFRなどを参考に、小・中・高等学校で段階的に実現する五つの領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」として領域別の目標を示すこととする。このことにより、小学校中学年段階から発達段階に応じて「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を一体的に育成し、これらの複数の領域を組み合わせることで効果的に活用する統合的な言語活動を一層重視することとする。

「外国語」等における小・中・高等学校を通じた国の領域別の目標（イメージ）たたき台（一部抜粋）

校種	CEFR レベル	聞くこと	読むこと	話すこと (やり取り)	話すこと (発表)	書くこと
高等学校	B1	○ 身近な話題や知識のある社会的な話題に関する短い会話を聞いて、概要や要点を理解することができるようにする。	○ 身近な話題に関する比較的短い記事やレポート、資料から、必要な情報を読み取ることができるようにする。	○ 公共の場所（店、駅など）において、自分の問題を説明し、解決することができるようにする。	○ 身近な話題や関心のある事柄について、即興で説明することができるようにする。	○ 自分の経験や身近な事柄について、複数のパラグラフから成る説明文を書くことができるようにする。
↑ 中学校	A2	○ 短い簡単なメッセージやアナウンスを聞いて、必要な情報を聞き取ることができるようにする。	○ 日常生活において身の回りにある短い平易なテキストから、必要な情報を読み取ることができるようにする。	○ 日常生活や自分に関連した事柄に関する短い簡単なやり取りをすることができるようにする。	○ 身近な事柄や出来事について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。	○ 自分が必要とする事柄について、短い簡単なメモやメッセージなどを書くことができるようにする。
↑ 小学校	(Pre-A1)	○ アルファベットの発音を聞いて、どの文字であるかが分かるようにする。	○ ごく身近にあるアルファベットの文字を識別し、発音することができるようにする。	○ 挨拶やごく短い簡単な指示に回答することができるようにする。	○ 定型表現を用いて、簡単な挨拶をすることができるようにする。	○ 目的を持ってアルファベットの大文字と小文字を活字体で書くことができるようにする。

平成28年12月21日 中央教育審議会答申 資料より

また、「学びに向かう力・人間性等」の育成のためには、生徒が言語活動に主体的に取り組むことが外国語によるコミュニケーション能力を身に付ける上で不可欠であることから、生徒が興味を持って取り組むことができる言語活動を易しいものから段階的に取り入れたり、自己表現活動を工夫したりするなど、様々な手立てを通じて生徒の「主体的に学習に取り組む態度」の高まりを目指した指導をすることが重要である。

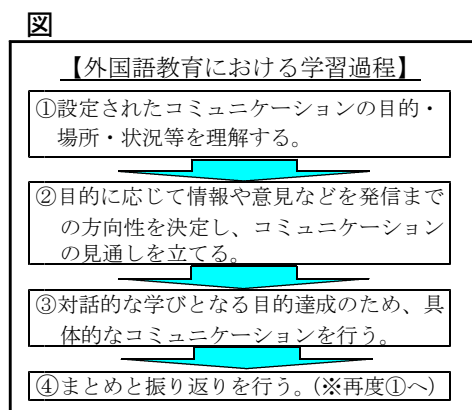
ウ 外国語科における「コミュニケーションにおける見方・考え方」

外国語教育で育成する資質・能力を踏まえ、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」とする。

(2) 具体的な改善事項

ア 資質・能力を育成する学びの過程

「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質・能力を育成するため、生徒が右図のような学習過程を経て、学んだことの意味付けを行ったり、既得の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動へつなげ、思考力・判断力・表現力等を高めていったりすることが重要である。



また、言語活動を行う際は、生徒が言語活動の目的や言語使用の場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題等を設定し、その目的を達成するために、必要な語彙や文法事項などの言語材料を取捨選択して活用できるようにする必要がある。

イ 科目構成の見直し

外国語科の科目構成を見直し、五つの領域を総合的に扱う科目として「英語コミュニケーション」を設定するとともに、発信能力の育成を更に強化するための科目として「論理・表現」（「発表、討論・議論、交渉」などにおいて、聞いたり読んだりしたことを活用して話したり書いたりする統合型の言語活動が中心）を設定する。

英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ
<ul style="list-style-type: none"> ○ 「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」を総合的に育成（受信・発信のバランス） ○ 明確な目標（英語を用いて何ができるようになるか）を達成するための構成・内容 ○ 複数の力を統合させた言語活動が中心 ○ 「英コミュⅠ」は中学校段階での学習の確実な定着（高等学校への橋渡し）を含む

論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
<ul style="list-style-type: none"> ○ 「話すこと」「書くこと」を中心とした発信能力の強化 ○ スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどの言語活動が中心 ○ 聞いたり読んだりして得た情報や考えなどを活用してアウトプットする統合型の言語活動

ウ 「主体的・対話的で深い学び」の実現

質の高い学びに向け、外国語によるコミュニケーションを通じて、生徒が自分の思いや考えが深まったり更新されたりすることを認識し、自信を持つことができるような学習活動を設けることが重要である。

<ul style="list-style-type: none"> ○ 「主体的な学び」の視点からの学習活動 コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定し、学習の見通しを立てたり振り返ったりする場面を設けるとともに、発達段階に応じて、身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定することなど。 ○ 「対話的な学び」の視点からの学習活動 コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、他者を尊重しながら対話が図られるような言語活動を行う学習場면을計画的に設けることなど。 ○ 「深い学び」の視点からの学習活動 外国語教育における「見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現し、学習内容を深く理解し、学習への動機付け等を行うことができるために、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じた言語活動を効果的に設計することが重要である。

2 資質・能力を育成する学習指導の改善・充実

(1) 「北海道学力向上実践事業」学力テストの分析

ア 学力テストについて

学力テストの問題は、学習指導要領の内容を踏まえ、「北海道高等学校学力向上実践事業」推進校及び協力校の協力のもと作成し、道内の高等学校第1学年を対象に「コミュニケーション英語Ⅰ」の内容について実施した。各学校は、自校の生徒の状況に応じて、コアアビリティ（Cモデル）、ベーシック（Bモデル）、アドバンスト（Aモデル）の3つのモデルから選択して実施した。

イ 学力テストにおける正答率の推移及び分析

Cモデルでは、過去3か年において「聞くこと」の正答率は約76%、「読むこと」は約60%である一方、「書くこと」は、平成27年度の約25%から平成28年度には約46%に大きく上昇した。今回から、「書くこと」の問題をイラストを使用した会話文にするなどの改善を図り、生徒の「書くこと」の能力をより正確に把握することができた。また、Cモデルにおいては、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」の3つの項目において、4間口以上の大規模校の正答率が小規模校の正答率をわずかではあるが上回った。

Bモデルでは、「聞くこと」の正答率は過去3か年において約70%であったが、「読むこと」は平成27年度の約50%から平成28年度には約56%に上昇した。「話すこと」については、平成27年度の約27%から平成28年度には約14%と大きく下降した。これは、平成28年度の「話すこと」のテスト内容について、生徒の実態に応じて難易度を上げたためと考えられる。また、生徒の「書くこと」の正答率が6.5%に上昇した。

Aモデルでは、「聞くこと」の正答率は平成27年度は約60%であったのに比べて、平成28年度には約52%に下がっており、「書くこと」については、平成28年度は約20%に上昇している。Bモデル及びAモデルそれぞれの「書くこと」の結果から、各校における「書くこと」の継続した指導の成果が現れていることが分かる。

学力テスト全体として、「聞くこと」及び「読むこと」に比べ、「話すこと」及び「書くこと」の正答率は、依然として低い状況にある。特に、平成28年度の「書くこと」の無回答率については、Cモデルで13.9%、Bモデルでは6.4%、Aモデルでは4.1%であった。Bモデルにおいては、生徒がこれまで以上に取り組むことができるようにするなど、学力テスト問題の改善を図ったことから、無回答率は平成27年度の約26%から平成28年度には約6%と大きく改善した。

一方、Cモデルの無回答率が3年間で10%以上であることから、Cモデルを採用する学校においては、生徒が自分の考えなどを「書くこと」について、関心・意欲を高めるための言語活動の充実を含めた授業改善が求められる。また、教科全体で授業改善を図るためには、各学校における教科研修の充実を図る必要がある。

【過去3年の正答率の推移】

< Cモデル >

	平成26年度	平成27年度	平成28年度
聞くこと	76.3%	77.4%	76.2%
読むこと	58.2%	60.4%	59.0%
書くこと	23.2%	25.3%	46.1%

< Bモデル >

	平成26年度	平成27年度	平成28年度
聞くこと	69.6%	70.0%	70.9%
読むこと	49.9%	50.6%	55.9%
書くこと	1.9%	3.1%	6.5%
話すこと	20.4%	26.5%	13.7%

< Aモデル >


	平成26年度	平成27年度	平成28年度
聞くこと	57.6%	59.4%	51.7%
書くこと	18.9%	15.6%	20.1%

< 「書くこと」無回答率 >

	平成26年度	平成27年度	平成28年度
Cモデル	12.3%	11.8%	13.9%
Bモデル	22.5%	26.2%	6.4%
Aモデル	4.6%	6.5%	4.1%

(2) 学習指導の改善・充実を図るための教科研修の例

ここでは、「話すこと」及び「書くこと」の言語活動の充実に向けた教科研修の例を示す。「CAN-DOリスト」に記載された「話すこと」及び「書くこと」の評価規準を踏まえた研究授業を実施し、研究協議において、今後の授業で取り組むべき課題を共有することにより、「CAN-DOリスト」の評価規準及び学習指導の改善・充実を図る。なお、本教科研修では、DVD教材「新学習指導要領に対応した外国語活動及び外国語科の授業実践事例映像資料3」（平成24年文部科学省）を活用している。

ねらい	研究授業を通して生徒の言語活動を分析し、「CAN-DOリスト」の評価規準及び学習指導の改善・充実を図る。また、DVD教材を活用して課題を明確にし、外国語科全体で今後の授業において取り組むべき課題の共通理解を図る。		
時間	100分	参加者	外国語科教員
	内 容		備 考
	1 研究授業の準備 ○ 授業者は、「CAN-DOリスト」に基づき研究授業のねらいを決め、学習指導案を作成する。（研究授業のねらいの例：「読んだことに基づき、自分の意見をまとめて発表できる。」）		【使用物】 ・「CAN-DOリスト」 「CAN-DOリスト」に記載された能力記述文
研究授業日の 1週間前 20分	2 学習指導案の検討及びDVD教材の視聴 ○ 授業者は、研究授業のねらいを説明する。（2） ○ 学習指導案を検討し、課題を出し合う。（5） ○ DVD教材を視聴する。（10） ・言語の使用場面と課題の設定 ・発問の工夫 ・効果的なまとめと振り返り ○ 授業参観の視点について、参加者全員で共有する。（3）		【使用物】 ・教材 ・学習指導案 ・DVD教材 DVD教材の内容は、読んだことに基づき、「話すこと」及び「書くこと」を統合的に活用し、自分の意見をまとめて発表する言語活動
50分	3 研究授業の実施		
研究授業日の 放課後等 30分	4 研究協議の実施 ○ 「CAN-DOリスト」を踏まえた言語活動等、今後の授業で取り組むべき課題についてKJ法により協議を行う。 ・研究授業における課題及び授業改善の方策を付箋紙に書く。 【個人思考】(5) ・グループで付箋紙を模造紙に貼り付け、共有する。 【グループ協議】(15) ・全体交流(5) ・まとめ(5)		【使用物】 ・付箋紙（2色） ・模造紙（1／2）  【KJ法による協議の例】
	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> まとめ（参考） ○ 生徒が言語活動の目的や使用の場面を意識して行うことができるよう具体的な課題等を設定することが必要である。 ○ 生徒が必要な語彙や文法事項などの言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが必要である。 ○ 言語活動を通じて、生徒の学びに向かう力・人間性等を育成することが重要である。 ○ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じた言語活動を効果的に設計することが必要である。 </div>		まとめ（参考） 中央教育審議会答申 （平成28年12月21日）

(3) 「主体的・対話的で深い学び」の実践例

次期学習指導要領における外国語教育では、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の五つの領域ごとに、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を一体的に育成する目標を設定するとともに、これらの複数を組み合わせる効果的に活用する統合的な言語活動を一層充実させることが重要である。また、生徒が外国語によるコミュニケーション能力を身に付ける上で不可欠である「学びに向かう力・人間性等」を含めた育成を目指す三つの資質・能力を踏まえ、小・

中・高等学校を通じて領域別の目標、指導内容等を体系的に整理し、「主体的・対話的で深い学び」を推進する学習過程を繰り返し経るような改善・充実を図る必要がある。

こうしたことを踏まえ、次に「主体的・対話的で深い学び」の実践例を示す。この例では、「主体的・対話的で深い学び」の視点から、「話すこと（やり取り）」及び「書くこと」の能力を育成するとともに、その能力を重点的に評価することができるよう「CAN-DOリスト」設定している。

ア A高等学校の「CAN-DOリスト」（抜粋）

A高等学校の「CAN-DOリスト」は、次期学習指導要領を見据え、五つの領域（「外国語理解の能力」（聞くこと、読むこと）及び「外国語表現の能力」（話すこと（やり取り）、話すこと（発表）、書くこと））について、どの時期までに何ができるようになるかを「～することができる」という具体的な文章（能力記述文）で生徒に提示していることが特徴である。

外国語理解の能力		外国語表現の能力		
聞くこと	読むこと	話すこと（やり取り）	話すこと（発表）	書くこと
・短めの会話・モノローグを聞き、概要を理解することができる。	・短めの手紙・Eメール・会話文を初見で読み、概要を理解することができる。	・与えられたトピックについて、即興で自分の考えや感想を話すことができる。	・思考力や批判的な視点を伴ったスピーチやプレゼンテーションができる。	・与えられたトピックについて、自分の意見や感想を書くことができる。


ミニ・ディベート

ミニ・ディベートに基づく英作文

イ A高等学校における「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた指導

外国語教育においては、生徒に自分の思いや考えが深まったり更新されたりすることを認識させ、自信を持たせることができるような学習活動を設けることが重要である。特に、情報や自分の考えなどを話したり書いたりする中で、外国語教育における「見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現し、学習内容を深く理解し、学習への動機付け等がされる「深い学び」につなげるために、授業において、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じた言語活動を効果的に設計する必要がある。

次の例は、生徒が、先述の「CAN-DOリスト」に記載されている能力を身に付けているかを測ることを目的に、ディベートの要素を取り入れた「話すこと（やり取り）」に係る活動を通じて、自分の考えを深めさせるとともに、「書くこと」に係る活動を通じて、深まった自分の考えを表現させる取組である。

「外国語表現の能力」	評価規準 (書くこと)	与えられたトピックについて、立場を決めて自分の意見や考えを論理的に書くことができる。
<p>1 評価の方法 ライティング活動</p> <p>2 ライティング活動の手順 与えられたトピックについて、3人1組の簡易なディベート（以下、ミニディベートとする。）を実施した後、自分の考えを英語で作文させる。</p> <p>3 ミニ・ディベートからライティング活動までの実施方法</p> <p>(1) 3人1組のグループをつくる。</p> <p>(2) グループでジャンケンさせ、勝者は審判（Judge）、2番目の勝者は賛成派（Affirmative side）、敗者を反対派（Negative side）に役割分担する。</p>		 <p>【ミニ・ディベートの様子】</p>

(3) 1つのトピックを与え、次のように、取組の前にやり取りの流れを板書した上で、賛成派及び反対派になった生徒はお互いの意見を英語で表現し合う。

(板書記載例) ※ J: Judge, A: Affirmative side, N: Negative side

J: High schools should give the students an opportunity to go abroad for school trip.

A: I agree with this idea because _____.

For example, _____.

What do you think?

N: I don't agree with this idea because _____.

For example, _____.

What do you think?

J: I support Mr. / Ms. _____ because _____.

(4) 上記のやり取りを役割を変えて3回行う。

(5) 次のループリックを事前に提示し、他者の意見を参考に賛成派又は反対派のどちらかの立場を選び、自分の意見を英作文する。

(ループリックの例)

項目	評価規準	評価		
内容	賛成・反対の意見が理由とともに述べられている。	A	B	C
構造	序論・本論・結論という構成で筋が通っている。	A	B	C
英語の正確さ	文構造や時制等の文法的な誤りは2つ以下である。	A	B	C

4 本取組の留意点

(1) 「主体的な学び」の実現に向けて

- ・学習内容に興味・関心を持たせる観点から、ミニ・ディベートにおいて生徒にとって身近なトピック (High schools should give the students an opportunity to go abroad for school trip.) を提示するなどの工夫をする。
- ・「CAN-DOリスト」及びループリックを事前に提示することにより、本時の活動において身に付けさせたい力や評価規準を明確にすることにより、生徒に見通しを持って学習に取り組ませる。

(2) 「対話的な学び」の実現に向けて

- ・生徒同士の対話を通じて、意見を交換させることにより、自らの考えを広げ深めさせる。
- ・同様の活動を3回行うことにより、自分とは異なる意見を聞く機会を与え、多様な考えを収集させる。

(3) 「深い学び」の実現に向けて

- ・賛成、反対及び審判の立場を経験させることにより、自分の意見を話させるだけでなく、他者の意見を聞く機会を与えるとともに、その後の書く活動を通じて自らの考えを再構築させる。

(4) 義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための指導例

現行の学習指導要領において、「生徒の実態に応じ、例えば義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための指導を適宜取り入れるなど、指導内容や指導方法を工夫すること」が示されている。このことから、全ての生徒が中学校で学んだことを、実際のコミュニケーションにおいて運用する力を十分に身に付けられるよう、指導の充実を図る必要がある。

ここでは、中学校の学習内容の定着を目指した「コミュニケーション英語基礎」におけるB高等学校の指導例を紹介する。

ア 概要

- 科目名：コミュニケーション英語基礎
- 指導方針：「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」のそれぞれの言語活動を通して、中学校で学習した内容の定着を図り、英語を「理解する」から「使える」という実感を持たせ、学習に対する姿勢を育成し、学習習慣の確立を目指す。
- 指導形態：(1)ALTとのティーム・ティーチング（週2回）とする。
(2)1クラスを10名程度の4つの小グループに分ける。
(3)各グループの1グループがALTとの少人数授業を行い、他の3グループはJTEによる授業を行う。
- 指導内容：(1)ALTとの少人数グループ授業では、ピクチャーカード等を用いた言語活動を行う。
(2)他のグループは、教科書の各単元の内容の理解及びトピックについての言語活動を行う。
- 評価：インタビューテストや定期考査、少人数グループ授業への取組の状況等を観点別に評価する。

イ 単元の指導計画（抜粋）

1 単元名 We are going to take a trip.

2 単元の目標

- (1) ペア・ワークやグループ・ワークにより、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けさせる。
- (2) 世界の国や地域についての説明文を読んで、内容を理解し、要約する力を身に付けさせる。
- (3) 学んだ表現等を用いて、自分の行きたい国やその理由について、発表する力を身に付けさせる。

3 単元の概要

本単元は、生徒が英語を用いて外国や地域について紹介するものである。国際理解教育の観点から、外国への興味・関心を育成するとともに、自分の行きたい国について伝える表現を学ぶ。

4 単元の評価規準

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
ペア・ワークやグループ・ワークにおいて、得た情報や自分の考えを積極的に伝えようとしている。	学んだ表現等を用いて、自分の行きたい国について発表できる。	(本単元では評価しない)	自分の考えや気持ちを伝える表現 (be going to ~) を理解している。

5 指導と評価の計画時間

時間	ねらい、学習活動、指導上の留意点	単元の評価規準	評価方法	
	【ねらい】 国名や地域の名称を正しく発音し、それぞれの国や地域の説明文を聞き取り、概要を口頭で説明する。			
	少人数グループ (ALT)	他の3つのグループ (JTE)		
1 ~ 5	【学習活動】 1 世界の国や地域の写真をグループに示し、国名等の発音練習をする。 2 写真で示した国や地域について、知っている事柄を英語でお互いにペアで伝え合う。 3 ALTにペアで話した内容を伝え、ALTが国や地域について補足説明したことをワークシートにまとめる。 4 自分の行きたい国を1つ選び、例を参考に行きたい理由をワークシートに記入する。 5 ワークシートに書いた内容をペアで練習し、順番にALTに発表する。 6 ALTからのアドバイスを参考に、ワークシートに書いた内容を訂正し、再度ペアで発表の練習をする。 7 ALT及びグループに対し発表する。	【学習活動】 1 教科書に記載されている世界の国や地域の写真を示し、国名等の発音練習をする。 2 ワークシートにそれぞれの地域や国について知っていることを日本語で箇条書きで記入する。 3 国や地域についての英語による説明をCDで聞き取り、キーワードをワークシートに記入する。 4 国や地域についての質問を板書し、答えを各グループで考え、ワークシートに記入する。 5 質問の答えを基に国や地域を説明する文をそれぞれ英語で作成する。 6 各グループ内で、記入した説明文を口頭で発表し合う。 7 各グループが、説明文を全体に発表する。	関・意・態 知・理 関・意・態 関・意・態 表現	活動の観察及びワークシート ワークシート ○ 指導上の留意点 ALTに対して生徒が発表する際には、ワークシートに記載した内容を読むのではなく、キーワードを用いて説明することができるように指導すること。 プレゼンテーション

Topic

スーパーグローバルハイスクール（SGH）における小学校との英語交流及び英語観光案内ボランティアの取組

北海道登別明日中等教育学校では、国際理解教育・外国語教育を重視しており、総合的な学習の時間における系統的な学習プログラムにおいて、コミュニケーション能力や語学力を育成することを目的として、近隣の小学校との英語交流に取り組んでいる。

ここでは、小学校との英語交流の取組と併せて実施している「ユネスコ有志実行委員会」や有志生徒による、英語を用いた観光案内ボランティアの活動を紹介する。

【小学校との英語交流の実施】

- ◆日時 平成28年9月15日（木）
平成28年9月28日（月）
- ◆生徒 4回生
- ◆訪問先 登別市立幌別西小学校

【ねらい】

- ・英語を用いてコミュニケーション能力を高める態度を育成する。
- ・英語学習への意欲を一層高める。

【成果】

- ・小学生が、自分の考えなどを表現する態度を身に付けることができた。
- ・外国語活動のアシスタントを務めることにより、英語学習への意欲の喚起を図ることができた。

【生徒の感想（一部）】

- ・交流を通じて、小学生に分かるように英語を教えることの大変さを実感しました。
- ・丁寧にゆっくり話すなど、子どもとの関わり方について学びました。

【活動の様子】



【英語ボランティア実施】

- ◆日時 平成29年7月15日（土）～
10月21日（土）
- ◆生徒 2～6回生（全4回実施で
合計18名）
- ◆場所 登別温泉周辺

【ねらい】

- ・郷土愛を育み、おもてなしの心とボランティア精神を涵養する。
- ・英語を用いたコミュニケーション能力を育成する。

【成果】

- ・地域の良さについて紹介し、観光客をもてなす心を育成することができた。
- ・ボランティアを通じて、臆することなく外国人と接することができた。
- ・英語によるコミュニケーション能力を向上させることができた。

【生徒の感想（一部）】

- ・地元を紹介するために、語彙を増やすことの大切さを感じました。
- ・普段は話す機会のない人とコミュニケーションを図ることができて楽しかった。

【活動の様子】



北海道登別明日中等教育学校のホームページ (<http://www.akebi.hokkaido-c.ed.jp/>)